

## 繰り返される、「やってはいけない」こと

使用者委員 吉富秀介

「偽造した預金証書を担保に資金を調達」  
「書き換えのできないはずの書類を書き換え融資を受ける」  
「本来貸し出せない取引先に『迂回融資』を行う」  
「不適切な会計処理が露見して業績が悪化する」

日本経済が「バブル」と呼ばれ、その「泡」が大きくなる過程や、「破裂」した後にも横行した違法行為が糾弾されたのは、今からおよそ30年前のことです。

社会人生活7年目ぐらいでしたか、バブルの後始末に関わるミーティングの場で

「方法はある。でも、やってはいけない。それは違法だから。」

と先輩から教育を受けたものです。そこでは「遵法」の大切さを学びました。

30年経った今、企業の責任ある立場にいる50歳代の皆さんは、同じような経験を積んで来られたことと思います。

しかし、「かつて見た記憶がある」風景に、最近多く接するのがとても不思議です。あの頃の不条理を見聞きした人であれば、繰り返すはずのない過ちだからです。

誰が？何が？間違った道に企業や人を導くのでしょうか。

真っ直ぐに伸びるレールを進むべきところ、「道から外れる」レールポイントを切り替えたのは誰なのでしょう？

不正に関わった全員の遵法意識が初めから低かったとは思いません。ただ、強引な手法を良しとする機関車が道を外し、連結された車両はそれに従うしかなかったとしたら、これほど不幸なことはありません。

「実績を残すために手段は選ばなくてもよい」

「皆がやっていることだから大丈夫」

「それで会社が喜ばばいいじゃないか」

伝え聞く、言い訳の数々にはうんざりします。

経済バブルの破裂とその後の不都合が次々と明らかになった時代を知っている人達がやるべきことは、「やってはいけない」ことに手を染めることではなく、かつて私が教わったように後進に「遵法」の大切さを説くことではないでしょうか。

時の宰相に関する書籍が売れたり、「バブリー」など好景気を述懐する前に、バブル破裂の後に何が起きたのか。そこに注目が集まってほしい昨今であります。

